

事 項	県南地域におけるりんご果実灰色かび病の異常多発要因		
ね ら い	平成14年、県南地域のりんご園のほぼ全域で、幼果にこれまで青森県で問題となること のなかった灰色かび病が多発した。本病の特徴を調査し多発要因を推察したので、参考に 供する。		
指 導 参 考 内 容	<p>1 病原菌及び病徴 病原菌：灰色かび病菌 (<i>Botrytis cinerea</i>) 病 徴：幼果のがくあ部が腐敗する。病斑は褐色で輪紋があり、その周縁部は鮮紅色 を呈する。被害果には枯死した花卉が残る場合がある。病斑部は乾燥してコ ルク化し脱落することが多いが、腐敗が果心部まで及ぶことはまれである。</p> <p>2 発生実態 (1) 県南地域のほぼ全域で発生が見られた。 (2) 7月調査時、発生は霜害果発生園で見られる傾向にあった。 (3) ほとんどの園地では被害果の多くが摘果によって除去されたが、一部では仕上げ摘 果後も1～2割程度見られた。</p> <p>3 推定される多発要因 本病について、田村ら(1981)は病斑のがく片部から始まっていること、及び枯死花 弁が付着しているりんご幼果に灰色かび病が多いことから、活性を失った花卉の細胞で 灰色かび病菌が繁殖し、ついでがく片を侵すと考察している。本調査においても、田村 が記載した病原菌と同一の病原菌が分離され、また病徴も同一であることから、県南地 域における本年の多発要因は以下のように推定される。 (1) 本年の開花期間は4月下旬～5月上旬であった。この期間の降霜により、霜害を受 け枯死した花卉が果実に付着したことで、病原菌の侵入が容易になった。 (2) 落花期頃から5月中旬頃まで低温多湿の日が続き、がく片に侵入した病原菌の生育 に好適な気象条件となった。 (3) 本年の多発は、上記のような発病に好適な気象条件が重なり発現したためと考えら れた。 引用文献：田村ら(1981)日植病報 47</p> <p>4 今後の対策 被害果は通常の摘果作業に従って除去する。</p>		
期待される効果	灰色かび病の診断が容易となり、被害果を適切に処分できる。		
利用上の注意事項	被害果を除去する場合、過度な摘果を避ける。		
担 当	青森県りんご試験場県南果樹研究センター 病虫肥料部	対 象 地 域	県下全域
発表文献等	平成14年度 青森県りんご試験場県南果樹研究センター試験研究成績概要集		

【根拠となった主要な試験結果】



ふじ (枯死した花弁が残る被害果)

ふじ

ジョナゴールド

写真1 灰色かび病被害果

表1 リンゴ灰色かび病被害果及び霜害果の発生状況 (平成14年 県南果研セ、八戸農改、三戸農改)

場 所	ふじ		ジョナゴールド		霜害果の有無
	調査果数	被害果率	調査果数	被害果率	
八戸市豊崎	100	0 %	-	- %	-
八戸市高橋	100	0	100	0	-
三戸町梅内	324	5.2	306	3.9	+
三戸町泉山	100	3.0	100	1.0	+
五戸町土井頭	100	0	48	0	-
五戸町浅水	98	6.1	100	1.0	+
五戸町豊川	100	12.0	100	12.0	+
五戸町扇田	303	1.0	300	1.3	+
田子町向山	100	0	-	-	+
名川町五日市	101	11.9	-	-	+
名川町上名久井	100	0	-	-	-
名川町斗賀	100	0	-	-	-
南部町大向	100	6.0	100	1.0	+
福地村福田	102	2.9	100	1.0	+
南郷村島守	101	0	104	2.9	+
南郷村大平	100	19.0	105	1.9	+
倉石村舘町	101	5.0	-	-	+
倉石村中市	100	19.0	100	18.0	+
新郷村松木	101	5.9	101	9.9	+

表2 灰色かび病の有無と霜害の有無との有無

灰色かび病被害の有無	霜害の有無	
	有	無
有	14	1
無	1	3

(注) クロス表相関は5%水準で有意(19園地調査)

- (注) 1 被害果：商品価値に影響すると考えられる程度の被害を受けた果実  
 2 霜害果：+ (がくあ部に輪状さびを生じている)、- (輪状さびを生じていない)  
 3 7月12~18日、仕上摘果終了の園地を調査。ただし、名川町斗賀及び倉石村舘町は未終了

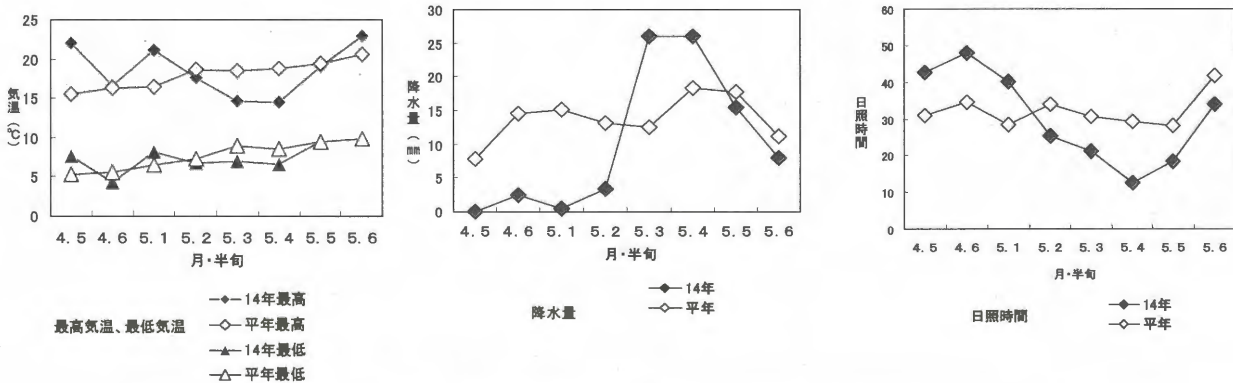


図1 開花期～落花期頃の気象 (平成14年 県南果研セ)